

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。

「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだってすませたんだろ」

「うん」

恭介はぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにはおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれたね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねえもん」

女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえつ、何だよ」

恭介はどすんと席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちえつ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」
なんて言う。

「問五、暮林やれ」
がふつうだと思う。恭介は立ちあがった。
「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えは先生が自分でやってくれることがわかっていた。

「わからないのかあ。問四の応用なんだけどなあ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行つて苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。

恭介は給食当番で、かつぼうを着て給食をとりに行く。

「やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立つて、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持って一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうなところを、じゃばつと勢いよくつぐ。なみなみとつがれたとん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

「少しにしてって言ったでしよ」

「せんせーつ、野村さんが好き嫌います」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅつと、恭介をにらみつけた。

お母さんが、恭介のちゃんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしていると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまんなより少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介はしを置いて、二階にあがった。部屋に入るとベツドの上に大の字になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならバンビだ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭

介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁がきらいで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあったから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんだ。恭介はベツドからおりて、机のひきだしをあけた。青い表紙のサイン帖が入っている。ちえつ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベツドに横になった。

中学にいったら生活が変わるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなものきなやつじゃないにきまつている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいかなくなる。クラスみんなもばらばらになつてしまう。あいつなんか私立にいつてしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびと

か、しまふとか、ベツトつぽくない、動物だけが住んでるといい。

恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったの

で、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」

先生が言った。

「何の用だと思う」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行つた。あのとき買い食ひしたのは暮林くんだけじゃないつて、わかつてたんだ。代表でお

こられてもらったんだよ。すまなかつたね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんとおきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……はい」

いったいなんなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱でくつ

をはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときは恭介もよくおぼえていた。

僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいっしょに、アイスクリームを買い食いついた。集合の時、僕だけがおこられた。——でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思つとせいせいする。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかつたね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

「あれ」

下駄箱の奥に、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「誰のだろう」

ばらばらとページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。恭介は、すのこをがたがたとけつて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声になると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、たねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「おもしろくないや」^E

声にだしてそう言つて、恭介はノートを机のうえにぽんとほうつた。

その日はそのあとずっと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよつて言つたんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこつそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもんな。そりゃあ、中学にいけないこともあるかもしれない。あいつよりかわい子がいって、大島よりぼんやりした教師がいるかもしれ

れない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。

僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

^F 俺たちに明日はない。暮林恭介

いつか観た映画の題名は、そつくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

問一 ——線部A「みんなの視線」とありますが、ここで「みんな」が共通して抱いた恭介に対する気持ちを説明しなさい。

問二 ——線部B「恭介はどすんと席にすわった」とありますが、この「どすんと」からわかる、この時の恭介の心情を説明しなさい。

と言つてにつこり笑つた。机のひきだしにしまつてある自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだろうか。恭介は、首のあたりがくすぐつたような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まつていた。

(江國香織「僕はジャングルに住みたい」による)

問三 — 線部C「あーあ。ジャングルに住みたい」とありますが、恭介にとって、「ジャングル」はどういう場所だと考えられますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現実には代わる、野村さんと自分との理想の将来像を実現できる場所。
- イ 現実とは異なり、野村さんと自分だけの時間をいつまでも続けられる場所。
- ウ 現実を忘れられる、野村さんよりもたくましく優位に立つ自分を実感する場所。
- エ 現実とは逆に、野村さんへの自分の好意をはっきりと口に出すことができる場所。

問四 — 線部a～dの「ちえっ」に共通して表れる恭介の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 思い通りに進まない学校生活への不満。
- イ 自分を理解してくれない周囲への怒り。
- ウ 素直になれない自分自身へのいらだち。
- エ 悲しみごっこに熱中するみんなへの反発。

問五 — 線部D「恭介は、すのこをがたとけつて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る」とありますが、ここからわかる恭介の心情を説明しなさい。

問六 — 線部E「おもしろくもないや」とありますが、恭介は何に對してこう言ったのか、説明しなさい。

問七 — 線部F「俺たちに明日はない」とありますが、この言葉に込められた恭介の気持ちを七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

若い人の間で近年流行している言葉に「ていうか」というものがある。本来は「というよりは……じゃないか」という意味の言葉であるが、現在は話題をころつと変えるときの便利な言葉として使われている。相手の話していることにイギを挟み、対話をより深くするために自分の意見を言う——そのための言葉ではなく、「ていうか」一語で話題を全く変えてしまうのだ。

私は十代の女の子三人が、こうして「ていうか」を連発する会話を身近で聞いたことがあるが、それはある意味で非常に見事なものであった。それまで相手の話していたことと全く関係のないことを話し始める。お互いに言いたいことだけを言う。全く話を聞いていないというわけではない。しかし、そこにまとわりついて同じ話題を継続するよりは、自分の話したいことを話す方を皆が選択している。これは完全に友達同士でキョウウユウ^②されているルールのようなので、その範囲では問題がない。限られた時間内にお互いに言いたいことだけ言うやり方として、「ていうか」の多用はそれなりに有効である。

「1」このような「ていうか」の使い方を私自身に對してされるとなれば別問題だ。まちがいに不愉快になる。というのは、いきなり話題を変えられてしまうと、それまで私が話していた内容がつまらなくカンシン^③を持てないものであったといわれている気がするからだ。「ていうか」の使用は癖になる。

友達以外の人と話をする状況になると問題が起こる。「ていうか」を乱用する症候群は、相手と自分との間にできるはずの文脈を軽視、ないしは無視する。

途切れ途切れの話題で満足してしまう関係は、対話的な関係ではない。それも一つのコミュニケーションだと言えないこともないが、その深まりのなさ、自己中心性、話せる相手の範囲の狭さなどから見ても、そこにコミュニケーション力があるとは言えない。

自分の身の回りの情報を伝え合うだけでは、コミュニケーション力は向上しない。相手の経験世界と自分の経験世界を絡み合わせ、一つの文脈を作り上げていくことで、次の展開が生まれる。それがコミュニケーション力のある対話だ。「2」コミュニケーション力とは、一言で言えば、「文脈力」なのである。

「文脈力」というのは、私の造語だ。しかし、その意味するところは読んで字の如しである。文脈を的確につかまえる力のことだ。

読むときには、どういう脈絡で文章が続いているのかを考え、次の展開を予測しながら読む。書くときにも、これまで書いたことをふまえ、次の展開にしっかりと脈絡がつながるように意識しながら書く。大量の文章を書くのが苦手だという人は多い。そのような人に対して、しばしば「文章力が足りない」という言葉が使われるが、私ならば「文脈力が足りない」と表現する。文章の上手い下手という問題ではないからだ。思考をつなげて織物のように織りなしていく力——文脈力があるかないかが、文章を書く上で最も重要な分かれ目である。

書かれた文章の場合は、文脈がはっきりしやすい。前後を見比べることができるからだ。会話によるコミュニケーションの場合には、話の内容は、より散らばる。あれこれと話題が飛ぶのが普通だ。それだけに、会話の場面で文脈力のあることは、隠れた力となる。文脈力のある人は、一緒に話をしている相手の文脈力がどれほどであるかもすぐに感じ取ることができる。話に脈絡があるかないかは、は

っきりしたことなのである。

会話における文脈は二つある。一つは、一人の人間をとって見た場合に、その人の言っていることに脈絡や一貫性があるかないか、ということ。もう一つは、お互いの発言がきちんと絡み合っているかどうか、ということだ。話している当人の言っていることが支離滅裂ならば、この人の文脈力は相当低い。一つひとつの話に意味がないということも問題だが、話と話の間に脈絡がないのは文脈力の欠如である。

文脈力のあるなしをはっきりさせる基準は、会話で迷子になったときに、しっかりと戻ることができるかどうかということだ。「会話の迷子」というのは、「今なんでこの話をしてるんだっけ？」という状態のことだ。会話は、本来、川の流れのようなものだ。水源があり、やがて川が太くなり支流に分かれていく。あまりに支流が分かれすぎて水の量が足りなくなり、そこで行き止まってしまふ。そうしたときには、水が多く流れるはずのところまで立ち戻ればよい。道が行き止まりになったら戻って考える、ということだ。

「なぜ今この話をしてるのか」という問いに対しては、

遡って答えることができれば、文脈力があるといえる。道がどこで分かれたのか、その分岐点をはっきりと言葉で示すことができるということである。

話の分岐点には、必ず目印がある。それは当然、言葉だ。ある言葉がきっかけになって、話がずれていく。脳の中は④アみ目のようになっていく。話の文脈とは別に、その話の中でふと出てきた言葉が脳の中で別の言葉やイメージにつながる。そこから話がずれていく。したがって会話の迷子になった場合には、分岐点になった言葉に戻っていけばいい。その分岐点のキーワードに戻り、別のルートへ展開するようにする。そのルートもすぐに行き止まりになりそうならば、もう一つ源流に遡る。その作業を何度かしていると、本来進むべき主流に立ち戻ることができる。

そもそも戻るべき主流などはなかったという会話を、おしゃべりという。スプリングラーで水を適当にまき散らすように、しゃべり散らす。これはストレス解消になる話し方だ。一般的に、このおしゃべりという会話スタイルは、女性がトクイだとされている。とりとめもないおしゃべりでストレスを発散するということが中高年の男性にはできにくいといわれている。話の本筋だけを話そうとすると、

話が単純になり、反復が多くなる。つまり、広がりがないつまらない話になりがちだ。上手に散らしつつ、また立ち戻る——この「散らす」と「戻る」の二つの技をともに磨くことで、コミュニケーションの幅が広がるのである。

会話のキャッチボールにも、小学生から大リーガーまでの実力差があるのだと認識している人は少ない。そうしたレベル差は、時と場合、相手にもよるといよりは、その人のコミュニケーション力にかかっている。相手のコミュニケーション力が優れていれば、たいていの人は気持ちよく話すことができる。カウンセラーと呼ばれる人たちは、たいていキャッチボール上手だ。どんな球を投げられても、気づかれないうちに素早く移動して胸の真ん中で受け止めてみせる。会話の流れはスムーズで自然のようだが、それはカウンセラーの対話力の高さに依存している。

自分の文脈力のレベルに気づくこと。まずそこから、コミュニケーション力の向上は始まる。

(齋藤孝「コミュニケーション力」による)

【注】

* 症候群——病気のようなもの。

* 支離滅裂——筋道が通らない様子。

問一 — 線部A「非常に見事なものであった」とありますが、「ていうか」を使って話すことの、どのような点が見事であると
作者は述べているか、解答欄に合う形で二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問二 — 1 1 2 に入る最も適切な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア すなわち イ ただし ウ たとえば エ では

問三 文中の に入れるのに適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰でも自分の話をしたいからだ。
イ 誰でも話をふくらませたいからだ。
ウ 誰でも話題を変えることが楽しいからだ。
エ 誰でも相手のことをよく知りたいからだ。

問四 — 線部B「文章力が足りない」、C「文脈力が足りない」とありますが、「文章力」と「文脈力」はどのような点が違うと作
者は述べていますか。具体的に説明しなさい。

問五 — 線部D「おしゃべり」とありますが、「おしゃべり」とは、どのようなものだと考えられるか、最も適切なものを次の
中から選び、記号で答えなさい。

ア 「会話の迷子」の状態がずっと続いている時間。
イ 女性にとって生きるのに欠かせないストレス解消の手段。
ウ 会話の根幹にあたる「話したい内容」が存在しないやりとり。
エ 会話の流れが、主流よりも支流のほうが大きくなってしまった状態。

問六 — 線部E「散らす」と「戻る」の二つの技とありますが、この「二つの技」を磨くことによって、コミュニケーションの
幅が広がると考えられるのはなぜですか。その理由を「散らす」と「戻る」を具体的に説明しながら、七十五字以内で答えな
さい。

問七 — 線部F「どんな球を投げられても、気づかれないうちに素早く移動して胸の真ん中で受け止めてみせる」とあります
が、これはどういうことを例えているか、説明しなさい。

問八 — 線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

